

海夫通信 第7号

特定非営利活動法人 霞ヶ浦アカデミー
事務所 〒311-3505 茨城県行方市浜 370 番地 1

(▼ ホームページ)

<http://www.k-academy.sakura.ne.jp>



[海夫] 潮の香りをほのかに残すこ
こ霞ヶ浦にもかつては多くの海の
民がいた。海に寄り添い潮の流れ
とともに暮らしていた人たちに思
いを寄せて、今生きる霞ヶ浦の海夫
たらんとす。

平成22年度総会を開催

平成10年からの任意団体としての活動を経て、平成19年から新たに出生した特定非営利活動法人は、3月末日、2年余りの活動を終えて、第2期を迎えることになりましたので定款にそって5月16日霞ヶ浦アカデミー総会を開催しました。

1 荒井理事長あいさつ

ご参加のみなさまには、午前中のジュニアの活動、午後からはジュニアの研究発表にご協力戴きましてありがとうございます。ジュニア会員の活動報告では、当団体の特徴、フィールドにおける実践活動重視という姿勢の表れたた立派な発表だったと思います。これは、また私たちの活動の柱の一つである自然の調査研究活動の反映でもあると思

7号 目 次

- ◎ 平成22年度総会を開催
- ◎ 記念講演「玉里御留川、近世霞ヶ浦を読み解く
池上 和子さん
- ◎ 海夫たちの霞ヶ浦 (3)
- ◎ 生き物アカデミー研究発表
「増えた魚、減った魚」
- ◎ 霞ヶ浦定期連続講座の予定

ますが、会員の方々も議論に加わっていただき大変意義深い総会イベントでした。これも、わたしたちの活動の成果の表れだろうと感じております。

当団体の創設は2007年10月でありまして、2年半が経過しました。第2期にはいるわけでありまして。その点から考えますと、日も浅く実績はまだ大きくありませんが、任意団体としての活動は、生き物アカデミー等約10年の実績があり、アカデミー卒業生が指導者側のスタッフとして当団体の活動に積極的に参加するという形で成果に表れており、まちがっていないことを確信し、自信をもって活動を進めてまいりました。しかし、活動に参加してくださる方々の数は、御覧のように十分とは申上げられません。今回、今回は新しく会員の方々を中心に、広くご協力を呼び掛けております。財政的問題、活動の拠点としての水の科学館や市戸の協力関係の調整等課題も山積みであります。が、ぜひ、ご議論いただき活動の内容を深めていきたいと考えておりますのでよろしくご検討下さいませ。よろしくお願いいたします。

2 活動報告

(1) 生き物アカデミー

毎月の観察会に先立って、まず玉造地先で漁獲された魚の種類と数を調べてきました。これに続いて季節ごとにテーマを決めてフナの産卵観察や仔稚魚の調査を行いました。フナの産卵は堤脚水路は農業排水路の水草等に行われ、そこである程度成長した後、湖側へ移動することを突き止めた。11月からはワカサギが増えてい

(2) 定期連続霞ヶ浦講座

平成20年12月からは「霞ヶ浦定期連続講座」を開始し継続してきましたが、今年度は新しく会員の方々を中心に、広くご協力を呼び掛けております。財政的問題、活動の拠点としての水の科学館や市戸の協力関係の調整等課題も山積みであります。が、ぜひ、ご議論いただき活動の内容を深めていきたいと考えておりますのでよろしくご検討下さいませ。よろしくお願いいたします。

(3) ケー・フェスタの開催

2000年から5年間にわたって実施していた漁業・魚食・環境保全等の広報イベント「水産フェスタ」は、コイヘルペス・ウイルス病の影響で2005年から中断していましたが、今年度は新しく「ケー・フェスタ」と改称して2月11日から約2週間におこなって開催しました。内容は、水質浄化アイデア・技術展、小池三郎「よみがえれ霞ヶ浦写真展」、海夫劇・コンサート、魚料理試食会、講演「霞ヶ浦浄化大作戦」や観察会などでした。

漁業協同組合を初め地元の方皆さんご協力を戴きました。メイン・イベントが行われた28日は、大雪となりましたが約400名の参加がありました。

(4) 調査研究

新しく海夫の歴史研究を開始しました「海夫通信5、6号」に掲載しました。

河川の総合毒性研究については、巴川について水質調査を実施しました。またワカサギ、外来魚、利根水系のヤマトシジミ資源増減の原因説明等多岐にわたって精力的に実施しました。

2 収支決算報告

収入は、会費・助成金（エコーいばらき信託基金、茨城県市民活動支援事業）・寄付を併せて539,597円、支出総額350,640円で、99,677円を次年度に繰り越しました。支出の内訳は事業実施に要した消耗品等が196,222円、通信費、旅費、印刷費等管理費が153,818円でした。

なお、収支決算の詳細を知りたい方は、事務局にご一報戴ければ総会資料をお送り致します。

3 平成22年度活動計画

平成22年度も「霞ヶ浦生き物アカデミー」および「霞ヶ浦定期連続講座」を継続して毎月一回実施します。当団体のもう一つの柱である環境教育講座（指導者育成講座）については10月および2月頃に、またkフェスタについても更に充実させて開催する予定です。

調査研究については、前年度に始めた海夫の歴史研究を継続します。また、霞ヶ浦の水質についてもプラנקトの推移の原因説明等にとりくみます。上記のテーマは、わたしたちが新しく挑戦する大テーマなのでぜひ多くの方々の参加をお待ちしています。

記念講演

「玉里御留川―近世霞ヶ浦を読み解く」

玉里文書調査研究会長 池上和子さん

池上さんを中心とする古文書調査研究会は、今回、玉里地区に残る多くの古文書を解説し、「水戸藩玉里御留川―近世霞ヶ浦の漁業と漁民」を出版しました（A4 362ページ）。この資料に基づき、江戸時代の漁業制度や漁業の実態と紛争、霞ヶ浦四十八津と御留川との関係、豊漁・不漁の年代等について詳細にお話を戴きました。網野善彦による霞ヶ浦四十八津発見から約50年を経てそれに続く新しい歴史のページが書き加えられました。その内容を中心に講演をお願いしました。

講演の内容 霞ヶ浦は沿岸海民の入会の共同財産

であり霞ヶ浦四十八津という自治組織によって管理運営されていたが、寛永2年（1625年）霞ヶ浦四十八津の反対も空しく、高浜入り水域の一部が「玉里御留川」として水戸藩の支配下に置かれることになった。「留」とは、領主が住民の入会権を奪う、制限するという意味である。概ね御留川の範囲は下玉里稻荷の森く安飾村柵塚の奥部に相当する水域であるが、時代をやや下った頃には、これに加えて御川筋がこれに加えられる。御川筋とは、外川ともよばれ、田伏く高須の線、現在の霞ヶ浦大橋から内側の高浜入りに相当する水域に当たる。漁場創建当初は「直網」とよばれる大型の地引網を操業して水戸藩が直接漁を行うが、天和3年（1683）からは3年年季の運上入札請負制となって落札者が請負、運上金を下玉里村庄屋に納め、下玉里村から「浮役」として水戸藩へ上納した。実際の漁は、運上人の下の地元漁業者が、うなぎ縄、鳥縄、えび引き、すずき縄、おだ、簀巻、さくら釣、ぼら釣など下請けをおこなっていた。漁場の位置や管理、漁期等や制度、霞ヶ浦四十八津との関係についても詳細に解説された。漁獲量の変動についても金額で詳細な説明があり、創建当初は豊漁であったが、1820年頃からは特に不漁となり、請負う者が現れなかったり、水戸藩に献上する鯉に苦勞するなど御留川の管理運営をめぐる玉里を初めとする沿岸住民の苦惱が生々しく語られた。詳細を知りたいかたは、「水戸藩玉里御留川」（玉里古文書調査研究会、小美玉市高崎1824、有料入手可）をご覧ください。

海夫たちの霞ヶ浦(3)

海夫注文に見る海夫 甲斐博

網野善彦は、1951年に始まる古文書収集の旅で、まず玉里村下玉里の鈴木源太左衛門家を訪ね霞ヶ浦四十八津の存在に気づいたのであるが、さらに収集した古文書の中に「海夫注文」を発見する。「海夫注文」とは、香取社の文書の一つで、平安時代の下総国および常陸国に分布していた「津」と「知行者」を列挙した古文書である。霞ヶ浦に依存して暮らしていた海夫たちは、平安時代には香取社大宮司の支配下にあつたとされるが、南北朝時代になると在地領主の影響を受けるようになる。当初、海夫は香取の海での漁労や舟運等の権利を香取社に認めてもらうかわりに香取社に対し供祭料を収めたとされる。しかし、時代とともに香取社との関係が希薄になる。香取社は、大和朝廷の東国支配の前進基地の守護神として鹿島社とともに創建されたとされるが、時代とともに香取社に代わって各津の地頭の力が大きくなり、香取社への供祭料が減少して行ったものと思われる。この状態を懸念した香取社大禰宜大中臣長房が、1366年、時の権力者であつた藤原家撰関に対し、かつての香取社支配の秩序回復を求め申請を行ったのである。この願いが撰関家によつて認められ、1374年幕府が安富道轍、山名友兼を通して各津の地頭に、支配権の打渡しを命じている

ことが明らかになつた。このことから霞ヶ浦の海夫が、朝廷、幕府や国府によつて直接支配されるわけではなく香取社へ供祭料を収めることで海上で自由に活動でき、しかも香取社との関係も比較的温和で、大禰宜が撰関家に対し申請を願ひ出る程の曖昧なものであつたことが伺える。各津の海夫は、それぞれの地頭のもとにあつて国家権力等によつて拘束されることが少なかったものと見ることが出来る。

琵琶湖・瀬戸内と香取の海の違い

以上が、網野善彦の中世の霞ヶ浦沿岸に、わが国ではめずらしい自由都市的性格を帯びた地域社会があつたとする根拠である。網野は江戸時代の霞ヶ浦四十八津についても「この霞ヶ浦の事例は全国的に見ても極めて注目すべき組織です。琵琶湖は、聖田浦が親浦になつており、霞ヶ浦よりたしかに漁労は廻船は発達しています。が、浦々の関係は平等でなく、親浦の聖田が仕切っています。霞ヶ浦・北浦の場合、津頭、小津頭というまとめ役がいますが、何かを決めるときにはまったくの合議制です」と述べている(ふるさと牛堀刊行委員会編・ふるさと牛堀2001)。

中世の香取の海周辺の地形は、他に類を見ないほど複雑であつた。この頃の霞ヶ浦北浦を包含する香取の海の面積は現在の霞ヶ浦の約2倍である。また、水域は、内湾、湖沼、河川におよび水質は、海水、汽水、淡水と幅広く、水深や形状も多様である。香取の海のこうした複雑な地形や環境は、その特殊な状況を把握したものでなければ航行できない。したがつて権力者であつても、海夫の案内と航海技術な

しには東国の各地にまでは到達できなかったのである(山崎謙霞ヶ浦湖賊1983)。わが国でも、例外的な複雑な形状と環境の内湾が民主的入会による自治と自由な地域文化を育んだ。

承平・天慶の乱から見えてくるもの

瀬戸内海では932年(承平2年)以降、海賊の動きが活発化し数千余隻の大海賊集団が出現する。朝廷政府は、すでに新羅の海賊を鎮圧した実績を有しており、この経験から海賊鎮圧のために軍事指揮権を持つ警固使を設置、追捕使を派遣して水軍をもつて海賊集団を鎮圧している。平将門の乱と同時に瀬戸内海で「純友の乱」が起こるが、国に抵抗した藤原純友も、この時の警固使で水軍の一翼を担つた人物であつた。このように政府側にも、瀬戸内から北九州海域にかけては、航海の手段を有していたのである。瀬戸内と香取の海を比較すると、瀬戸内は内海であり、いずれの海域も同傾向の形状、地形、気象条件を備えており、同じ航海術が適用できた。これに対し香取の海は、前述のように内湾、河川、湖沼、湿地が広がり地理的条件を熟知しているものでなければ未知の世界に迷い込んで元に戻る事ができない。海賊・賊馬の餌食になる危険性が高かつた。935年以降、東国では桓武天皇の4代目、高望王の三男の平将門が、一族の勢力争いの過程で叔父平国香殺害に端を發し、常陸・下野・上野の国府を襲撃し関東一円を掌握、東国建国を宣言し、自らを新皇と称する。

国府攻略

この行為は、朝廷によつて反乱と看做され追討軍

平貞盛、藤原秀郷によって滅ばされる。平将門の拠点は、現坂東市(旧猿島町)であり、交通の手段として舟運は不可欠であった。高浜入干拓反対運動武力闘争で指揮をとった山口武秀も「この乱で霞ヶ浦の湖賊は将門を助けて動いた。東国住民そのものが起こした乱ではないにしろ、東国の先住民おして西方の支配者への反抗行為に加担するのは、領けるものである。将門戦死後もなお、追われる残党を水上航路で江戸へ脱出させている」と述べている(山口武秀・霞ヶ浦住民の戦い 1983)。また、将門伝説によれば、常陸国府の襲撃は以下のとおりとなっている。「天慶二年、平将門が常陸国分を攻撃した。東方軍は、土浦から船で霞ヶ浦を渡り、高浜方面から上陸した。将門自身は、桜川を渡って、中央部隊と西方部隊を指揮し、中央部隊に恋瀬川付近から国府軍を牽制させ、その間に、西方部隊を柏原方面に迂回させて府中を攻め、国府軍を攻略した」とある(村上晴樹 2001)。この伝説から、常陸国府と将門の戦いは、相当な規模のものであったことが伺える。まず、土浦からの東方軍が海路で高浜に向現山王川河口付近に上陸、川沿いの低地を北上、国府の東側に伏せ機を窺がう。西方軍は恋瀬川を登って現府中橋付近から国府西側に待機する。そして中央軍が現恋瀬橋付近に上陸した後、中央を国府に向い国府軍を挑発、牽制し、手薄となった背後の南西へ東から東方および西方軍が攻めかかり攻略したものと思われる。高浜入干拓反対運動の武力闘争で、山口武秀は鉄のフェンスで囲われ機動隊の駐屯する内水面水産試験場を、主力を正面玄関から牽制しつつ、漁船を使って

湖上から試験場背後に回りフェンスを乗り越え場内施設を攻撃している。舟運が重要な交通手段であった中世の霞ヶ浦において海夫たちの役割が計り知れない程重要であったことを示す事例である。

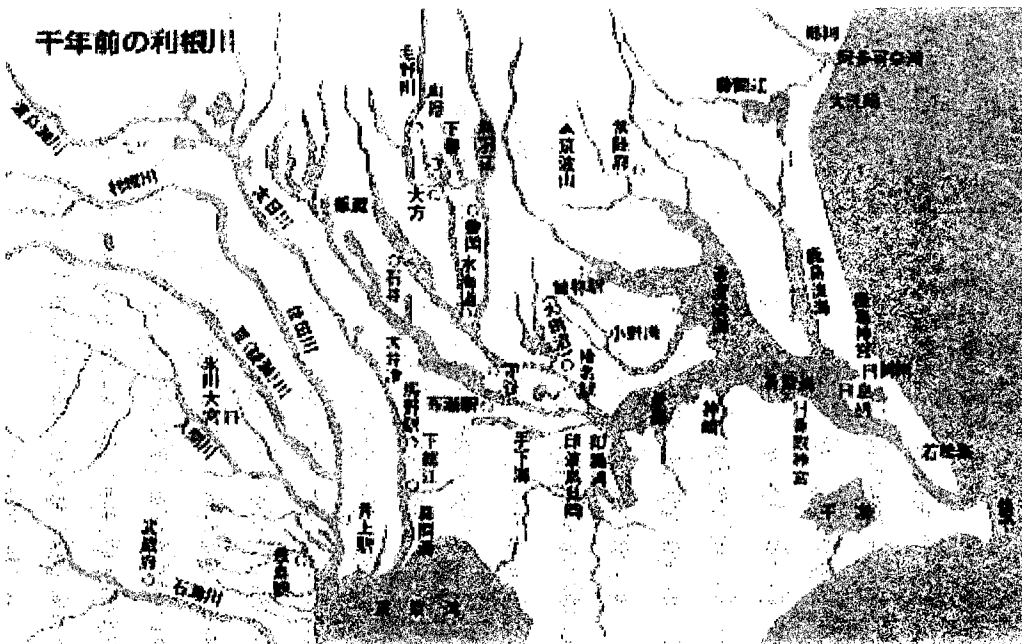


図 香取の海(さわらび通信 2002.3.16より引用)
中世香取の海は、霞ヶ浦・北浦を中心に、印旛沼・

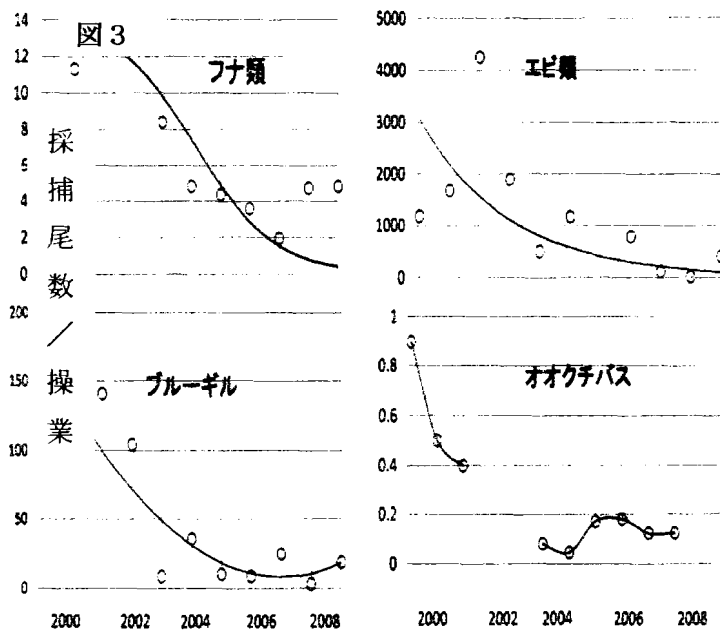
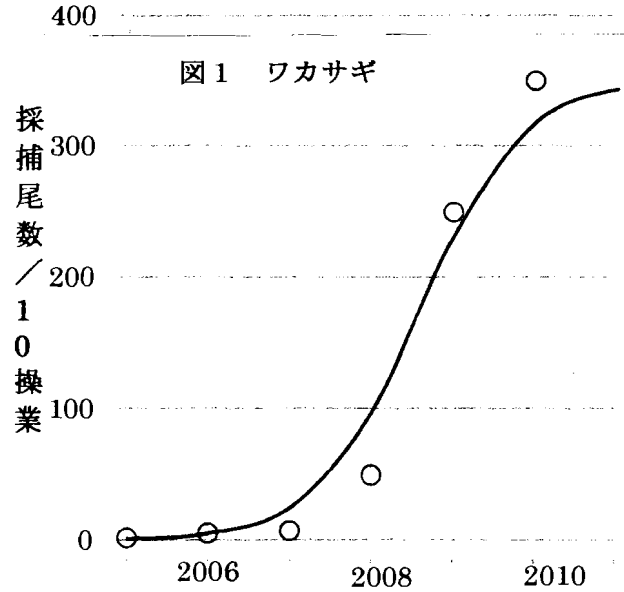
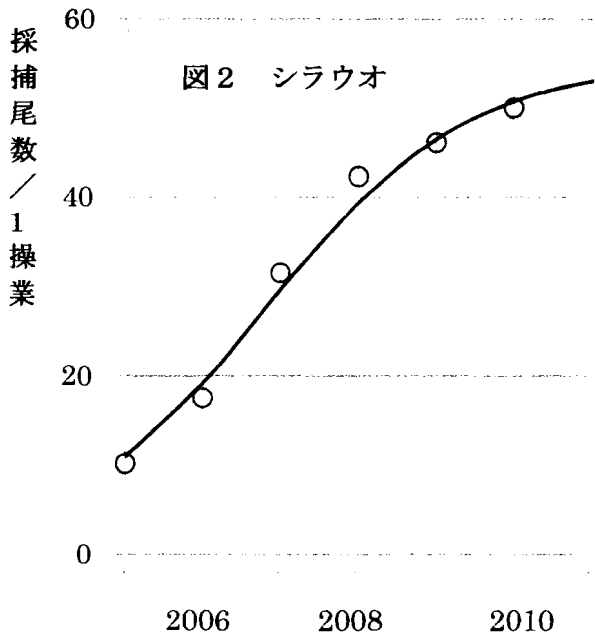
手賀沼は当然であるが、鳥羽江(現柿岡付近)、上流は現ギ鬼怒川・小貝川にまで至る広大かつ多様な形状の内湾であった。また、河口の銚子から比較的近い位置に安是湖が、さらに南下すれば東京湾に至る点も注目すべき点である。

生き物アカデミー調査研究公開發表

増えた魚、減った魚

1 増えた魚

今年の特徴の第一は、ワカサギが増えたことです。湖岸での投網の調査でも浅瀬やドック、河口で比較的早い時期から確認されました。10月頃から釣の対象ともなり、ワカサギが増えていることが周知されるようになりました。玉造地先の定置網の調査結果を図示したものが図1です。このグラフによれば、ワカサギが増えはじめたのは2006年頃からは増えないかと考えられます。しかし、断定する程明瞭な傾向とは云えません。そこで次に同じ産卵生態を持ちワカサギ同様、動物プランクトン食性のシラウオの資源動向を見たのが図2です。シラウオの場合にも、ワカサギ同様最近増加し続けていることがわかりますが2005年には既に増加が始まっていることがわかります。図の近似教区柱から推定すると、この増加は2003年頃でしょう。シラウオの資源動向を視野に入れて考えると、産卵期が2~3月で動物プランクトン食性のワカサギ・



シラウオの資源水準は、2000年代に突入するころから増加し始めたものと考えられます。この他、動物プランクトン食性魚のクルマサヨリについても最近5年間、増加傾向が見られます。したがって動物プランクトン食性魚全体が、増加傾向にあるものと見られます。

2 減った魚

明らかに減っている魚は、まずブラックバス（オクチバス）です。最近では、網に入ることが珍しい程少なくなっています。数えるのが大変な程網に入っていたブルーギルも最近では一回に10尾程度にまで減少しています（図3）。

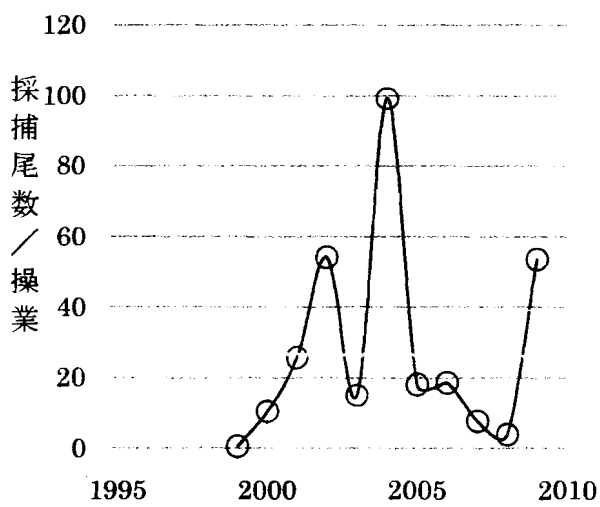


図4 アメリカナマズの動向
玉造地先霞ヶ浦の張網漁獲量

このことを反映して、ブラックバス釣人がめっきり減っています。オクチバスとブルーギルは琵琶湖でも減少傾向にあるようです。

在来種の中で減少している種の一つはフナ類です。2000年頃から減少が続いています。最近2年やや上昇しているようです。しかし、フナ類の全盛期の1980年頃に比較すれば、まだまだ低水準であることには変わりありません。

顕著な減少を示しているもう一種はエビ類です。年によっても違いますが、全体的にみると減少傾向にあるのは間違えないようです。エビ類は、テナガエビが漁獲の対象となっていました。定置網にはスジエビが見られるようになってきました。

3 アメリカナマズの動き

気になる外来種アメリカナマズの動向ですが、相変わらず多数入網しています。

アメリカナマズが増えはじめたのは2000年頃からで2003年に大発生し翌年の2004年には10cm位の稚魚が大量に網に入りました。その後、減衰しつつあるようでしたが昨年は再び増加傾向を示しており、暫くはこの状態が維持されるのではないかと見ております。

4 河川に産卵する魚、

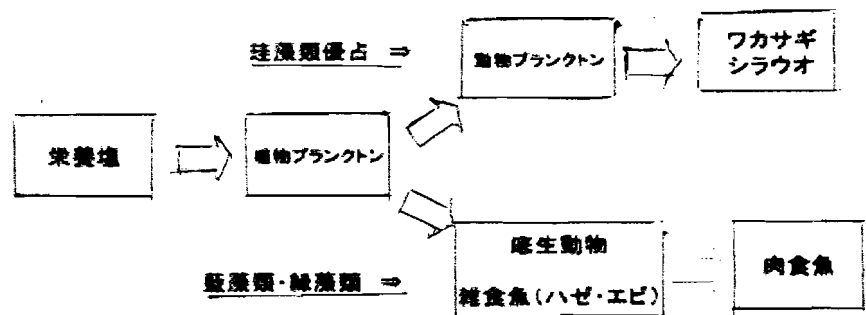
河川に遡上して産卵する魚は、産卵する場所が確保されているので増えていくのではないかと考えられていましたが2001〜2003年の間に一時的に増加しましたが、その後は減少し現在で元の状態に戻ったようです。

5 なぜ、ワカサギが増えたのか

ワカサギ・シラウオが増えたのか、その原因は幾つかが考えられます。親魚や産卵場の確保、孵化直後の初期の餌料の状態ですが、基本的要因は霞ヶ浦の魚類の生産の基礎となる植物プランクトンの変化ではないでしょうか。ワカサギが増え始める二〇〇〇年頃から、糸状藍藻類が少なくなつて珪藻類が増えていきます。一般的に珪藻類は、動物プランクトンを経てワカサギ等の動物プランクトン食魚へ、藍藻類・緑藻類はデトリタス（バクテリアが分解中の有機物）を経てエビ類ハゼ類等の雑食魚へ転換されるとされています。この関係を図示したものが図5です。霞ヶ浦の水質や湖内の物質の動きが2000年頃から少しずつ変化してきたことが主な原因ではないかと考えられるわけです。このことが正しいのか、また、なぜ珪藻類が増えたのか、これらについては今年の研究課題として解明に取り組んでいます。

図5 魚の増加・減少の原因

餌がかわったから？



〔2009年度霞ヶ浦生き物アカデミー参加者〕

- 横島怜、横島幸史郎、早川直人、三枝義輝、佐竹章敏、佐竹葉月、井村大成、八百川裕仁、川崎貴久、風間剛宏、野原幸哉、関柁真（以上小学生）小泉千佳（中学生）、田中健太、菊地章雄（以上高校生）、尾崎遼平（大学生）、宮本嘉博、野原小右二、浜田篤信（以上シニア会員）

生き物アカデミー受講生募集

毎月第三日曜日九時半から一二時までの間に、魚類の調査、水質の調査等の研究や湖岸の観察を行っていただきます。参加者を募集しています。年齢や経験は問いません。ぜひ大きく変わりつつある霞ヶ浦を調査研究し再生を実現しましょう。歴史研究についてもご応募ください。

事務局 | 299-46-0988 kusewakyu@nion.ne.jp 浜田

〔新入会員〕 早川直人さん

〔退会〕磯前長寿さん

〔会員募集〕

会員を募集しています。

普通会員

入会金 1,000円

年会費 3,000円

賛助会員 10,000円

〔入会の方法〕

氏名、住所、連絡先、会員の種類をご記載の上下記にご連絡下さい。

〒311-3505 行方市浜370-1

霞ヶ浦定期連続講座の予定

- 8月22日「第22回史上最大のアオコ発生の謎」
- 9月19日「第23回霞ヶ浦水資源開発史4、10月17日「第24回利根川水系シジミ漁業の盛衰」